

国語外国語化論の再考Ⅰ

森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」について

山井 徳行

Sur les propositions du Remplacement du Japonais Par une Langue Étrangère

- Celle de M. Arinori MORI et Celle de M. Naoya SHIGA -

Noriyuki YAMAI

序章 現代において国語外国語化論を再考する意義

明治維新の直後と第二次世界大戦の直後に、傑出した日本の知性によって、極論とも言うべき国語外国語化論が唱えられた。森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」である。その論の先鋭さは、一つの国家がその歴史的遺産の最たるものである自国の言葉を廃止して、それを外国語によって置き換えようという点にある。当時の日本語が、文語と口語の大きな乖離や漢文の影響で今日のように整備されていない状態であったとしても、である。単に外国語を完璧に学ぼうという意味ではなく、それを母語に換えようという提案は、歴史的に一つの民族が自発的に独自の言語を放棄した例が皆無に等しいことからしても、驚くべき提案であることは確かである。時間がかかるにしろ、外国語をいずれは母語にしようという意見で、このように書くだけで、表現が抵抗するのを感じる程である。すなわち、外国語と母語とは本来イコールで結び付けることが出来ないものであるから。二人の提案はまさにこれを実行しようというものであった。

一般的に、二人の提案は西洋文化・文明への日本人の劣等感を極端に示した恥ずかしき例として揶揄されるに過ぎない。

日本人としての自覚をもって英語を学ぼう、また日本語を国連の公用語にしようという提案している言語学者、鈴木孝夫もその著書『日本人はなぜ英語ができないか』(岩波新書、1999年7月)のなかの第Ⅰ章「外国語に憧れる日本人」に小見出し「日本語劣等感」をもうけて、この極論について次のように言う。

何しろ明治以来日本では、社会の指導的立場にあった立派な人が次々と、日本語は駄目だ、日本語を使っている限り日本人は世界の流れに遅れてしまう(いまはコンピューター関係の人々の間に強い意見) いっそ日本語を捨てて英語(かフランス語)のような優れた便利な言語を、日本の国語として採用しては(森有礼、志賀直哉、尾崎行雄)といった提案をするひとがあとをたたないからです。これほどまでに極端なことは言わない人でも、せめて文字だけは「万国共通」のローマ字にして漢字はやめよう(田中館愛橘、田丸卓郎)とか、やさしい数の少ない仮名だけを使うことにしたらといった日本語(表記)改良案を何度も唱えてきました。(PP17~18)

1999年1月に出版されて驚異的なベストセラーになった『日本語練習帳』で大野晋は、志賀直哉に対して次のように言う。長いので大野の志賀に対する評価の箇所を中心に抜き出してみる。

戦前しきりに小説を読んでいた私は、簡潔な名文を書く作家として志賀直哉を深く尊敬していました。当時、志賀直哉は小説の神様といわれていたのです。

・・・(中略)

第二次大戦後のアメリカは占領政策の一環として「教育使節団」を日本に派遣し、教育改革のために漢字使用の全廃、ローマ字などの表音文字専用への移行を勧告しました。

・・・(中略)この混沌騒然とした空気の中、昭和二年四月、雑誌『改造』に志賀直哉は「国語問題」という三二〇〇字の文章を発表しました。

・・・(中略)

志賀直哉は、言語を、スイッチによって、右に切り換えれば日本語、左に切り換えればフランス語というように、切り換えのきく装置だとも見ているようです。・・・(中略)志賀直哉には「世界」もなく、「社会」もなく、「文明」もありはしなかった。それを「小説の神様」にしたのは大正期・昭和前期の日本人の世界把握の底の浅さのあらわれであるでしょう。

では志賀直哉は本質的に何だったのか。「写生文の職人」だったのではないか。名工でも職人は世界のことなど考えに入れられない。・・・(あと省略)(PP106~110)

ほんの3200字の小論から大野晋は、常識人としての知識人の苦悩を描き、その文のうまさによって小説の神様ともいわれた志賀直哉を単なる文の職人に過ぎないと決め付けます。小説家という言葉の専門家が、その母語が道具として実に不便だと断言したのだから、その日本語を一生の研究テーマとして選んだ学者が腹を立てるのは理解できないことではない。それにしても、感情的な反応だと思う。このような事態自体が異常ではないか。

鈴木孝夫もこの志賀直哉の小論を取り上げて、かなり詳細に論じているので、あとで彼の反論も紹介したい。

以上の例で判るように、「国語英語化論」も「国語フランス語化論」も軽侮の対象になったとしても、真剣に取り上げられなかった、と思われる。もっとも、論じるにも足らずという態度も一つの戦略であるとすれば、そのような感情的な反応を引き出したと言うべきだろうか。もっとも、それらの論が発表された当時には、それなりに真剣に論ぜられたのかもしれない。しかしながら、この小論では歴史的な詳細を述べることはせずに、あくまでも現在の日本語の問題と関連して論じたい。

日本が戦後の混乱から立ち直り、世界の経済大国として、非西洋の国家としてただ一国、先進国に仲間入りしている現在、日本語の否定といった自己卑下的な議論はまったく顧みられることがない。そのような西洋への劣等感からまだ自由になれないのかと嘆かれるに過ぎない。

それでは何故、今そのような国語外国語化論を再考しようとするのか。そこにどんな意義があるのか。それは二つの日本の現状認識に依っている。一つは、現代の英語学習の要請の過熱ぶりであり、情報技術の進歩や人口移動の国際的流動化による学習効率の飛躍的向上の可能性である。この傾向は、平成12年1月に小淵首相の私的懇談会「21世紀日本の構想」が提言した英語第二公用語化論にも端的に現れている。もう一つは、日本語における活字離れとそれに必

然的に伴うであろう日本語力の低下の蓋然性である。

論理的に突き詰めた言い方をすると、森有礼や志賀直哉の論が無視される一方、日本の現実には彼等が指し示した方向に進んでいると、言えるのではないか。英語を確実にものにする最善の方法は、一般的に言えば英語を母語とすることである。そのためには、母語としての日本語を廃止して、英語を母語にするという政策をとることである。これは、まさに「国語英語化論」の主張ではないか。

当然、日本人は日本人としてのアイデンティティを失ってしまうという反論が出てこよう。言語は文化の統合的遺産であり、その言語を失うものは文化をも失ってしまうという論は一般に認められている。日本人として、外国人とのコミュニケーションの道具として英語を学ばなければならないのであって、英語を学ぶこと自体が目的化してはならないという議論も成立する。それに、日本人全体がかなりの水準で修得している日本語という道具を手放すとは、多くの人間にとってこの上なく不便で不愉快なものであるから、本当のところは誰も真剣に日本語を廃止するなどとは考えていないのだろう。

だが、日本の現実には不思議なことに少しずつ英語にすりより、日本語がないがしろにされていないだろうか。母語としての日本語教育ということがきちんと検討されていないのではないか。国語を教えるとは、何を如何に教えることなのか、という基本的なこともまだ共通の認識になっていないように思われる。混乱状態にあると言えよう。

このような観点から、すなわち現代の日本の言語状況をきちんと捉えて、これからの言語政策を考える上で、国語外国語化論を再考することは意義があると考えられる。

第一章 森有礼の「国語英語化論」とはなにか

森有礼は、1947年に当時の薩摩藩の藩士の五男として生まれた。11才くらいの時に藩校造士館に入学して漢学を学ぶ。しかし、14才くらいから洋学を志し英語を学びはじめる。薩英戦争の後の薩摩藩留学生として18才に満たずして、イギリスの地を踏む。2年後にはアメリカに渡って勉強を続けた。そして1868年6月、明治への改元の少し前に帰国した。21才になろうとしていた。すなわち、森は3年間の欧米への留学を終えて、明治時代の幕開け直前に動乱の日本に戻って来た。そして、1870年の末に若干23才にして、弁務士すなわち外交官としてアメリカに赴任した。

外交官としての仕事をする傍ら、森は政治・経済・教育・宗教の分野で研究を続け、本も出版している。このような森の人生の跡をたどると、時代の激動期に急流のように才能を発揮する若き知性の躍動感が感じられる。

1973年の元旦に『Education in Japan』の序文を書き終えている。この本はその年末、ワシントンの書店から出版された。その序文は日本の歴史全体をアメリカ人に解説するかなり長い力のこもった文で、その最後に、有名なあるいは悪名高き「国語英語化論」を展開している。と、いってもそれほど長くないし、その原文が紹介されることもあまりないので、ここにその部分を引用したいと思う。

An allusion to the subject of the Japanese language bears a most direct relation to the contents of this book. In the style of expression, the spoken language of Japan differs considerably from the written, though in their structure they are both mainly the same...(中略)

The vowel-sounds are each defined and all short. The style of the written language is like

the Chinese. In all our institutions of learning the Chinese classics have been used. There are four different methods of writing a character, and all of them are of Chinese origin. These methods differ in the degree of their complexity, and are graded according to their simplification of the Chinese character. The words in common use are very few in number, and most of them are of Chinese origin. There are some efforts being made to do away with the use of Chinese characters by reducing them to simple phonetics, but the words familiar through the organ of the eye are so many, that to change them into those of the ear would cause too great an inconvenience, and be quite impracticable. Without the aid of the Chinese, our language has never been taught or used for any purpose of communication. This shows its poverty. The march of modern civilization in Japan has already reached the heart of the nation - the English language following it suppresses the use of both Japanese and Chinese. The commercial power of the English-speaking race which now rules the world drives our people into some knowledge of their commercial ways and habits. The absolute necessity of mastering the English language is thus forced upon us. It is a requisite of the maintenance of our independence in the community of nations. Under the circumstances, our meagre language, which can never be of any use outside of our islands, is doomed to yield to the domination of the English tongue, especially when the power of steam and electricity shall have pervaded the land. Our intelligent race, eager in the pursuit of knowledge, cannot depend upon a weak and uncertain medium of communication in its endeavor to grasp the principal truths from the precious treasury of Western science and art and religion. The laws of state can never be preserved in the language of Japan. All reasons suggest its disuse.

〔新修森有禮全集 第5巻 大久保利謙監修 文泉堂書店 1999年8月 PP185～187〕

すべての文章が論題のテーマと関連しているわけではない。しかし、この文章を含む序文全体を読んでみて今の時点で感じるのは、日本語の大きな変化と、それと比較した英語の安定性である。森が同じ主旨の文を当時の日本語で書いたとしたら、戦後生まれの者にとって、難解な文章となっていたでしょう。まさに、「The style of the written language is like the Chinese」、「Without the aid of the Chinese, our language has never been taught or used for any purpose of communication」であり、かつ当時は複雑な旧漢字・旧仮名遣いを用いていたし、送り仮名の規則なども曖昧であったからである。このことを実感するためには、新修森有禮全集の森の日本語を読んでみるとよく分かる。戦後に義務教育を受けた者にとっては、戦前に出版された本は、上に述べた理由により読むのがかなり難しい。戦後に行われた日本語の大改革の当然の結果である。ここに、日本語の大きな変化に起因する知的断絶があると指摘しておきたい。

さて、森の日本語に対する評価は実に低い。「The march of modern civilization in Japan has already reached the heart of the nation - the English language following it suppresses the use of both Japanese and Chinese」であり、「The laws of state can never be preserved in the language of Japan. All reasons suggest its disuse」とまで言う。

森が挙げる理由は、「The commercial power of the English-speaking race which now rules the world drives our people into some knowledge of their commercial ways and habits. The absolute necessity of mastering the English language is thus forced upon us. It is a requisite of the maintenance of our independence in the community of nations」とあるように、英語を母語とす

る人種が世界を制して、かれらの商売のやり方や習慣を身に付けざるをえず、英語習得は日本が独立を保つためにも絶対必要であるということにある。西洋列強から押しつけられた不平等条約の改正に外交官として苦心し、世界における欧米諸国の植民地支配を留学体験のなかで認識した若き日本の知性の危機感の現れであった。

国家の法(The laws of state)が、日本語によって維持できないという断言は、識者からは極論と批判される。しかし、森の目には当時の日本語は日本という国を纏めていくには不十分と映っていた。

上で引用した森の文章は、出版された本に掲載されているという意味で公的な発言とみることができる。しかし、その本の出版に先だって、森は当時の有名なアメリカの言語学者W.D. ホイトニー(WHITNEY)に書簡を送り、自説の国語英語化論を展開し意見を求めている。

すなわち、1872年5月21日(森は満24才)に、ホイトニー宛の手紙を書く。簡易英語を日本の国語とする政策を説明し、意見を求めた。この手紙には、森の論がより明確に表現されているし、その論にかなりの日本の指導者が賛同の意を呈していたことも窺える。それに対して、1872年6月29日、ホイトニーが、森に返書を書く。簡易英語を民族文化の継承の立場から否定し、英語を日本の国語にする森の案に否定的な内容であった。ホイトニーの返書は、森の国を思う心情を汲みながらも、言語と民族との深い関わりを指摘して、森を宥めるといふ感がある。森のホイトニー宛の手紙は何故か収録されず、返書のみが『Education in Japan』に付随文として収録された。

一方、森の『Education in Japan』出版後、当時イギリスに留学中だった馬場辰猪が、1873年出版の『ELEMENTARY GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE WITH EASY PROGRESSIVE EXERCISES』(日本語文典)の序文にて、森の国語英語化論に反駁している。

この三つの資料を検討すると森の論の真意がより明確になると思う。引用が多くなる嫌があるが、森の論をなるべく正確に再現するという意図から許されると思う。

まず、ホイトニー宛の森の手紙の検討から始める。

The spoken language of Japan being inadequate to the growing necessities of the people of that Empire, and too poor to be made, by a phonetic alphabet, sufficiently useful as a written language, the idea prevails among us that, if we would keep pace with the age, we must adopt a copious and expanding European language. The necessity for this arises mainly out of the fact that Japan is a commercial nation; and also that, if we do not adopt a language like that of the English, which is quite predominant in Asia, as well as elsewhere in the commercial world, the progress of Japanese civilization is evidently impossible...

〔新修森有禮全集 第2巻 大久保利謙監修 文泉堂書店 1998年3月 PP51~52〕

日本の口語は貧しく、発音に忠実なアルファベットで表記されたとしても日本人の必要を満たすには有用ではないので、日本が時代の要請に応じて発展していくためには、欧米の豊かな言語を採用せざるを得ない、なんと言っても、日本は商業国家なのだから、と森は主張する。ここに、国の発展、日本語の貧弱さ、容易な表記の必要性という意見が端的に現れている。

この3点は手紙の中で繰り返し強調される。例えば、「It having been found that the Japanese language is insufficient even for the wants of the Japanese themselves, the demand for the new language is irresistably imperative, in view of our rapidly increasing intercourse with the world

at large (P 52)と、日本語は日本人の必要をも満たせないし、世界との交流のためにあたらしい言語が必要であるとか、「Schools for the Japanese language are found to be greatly needed, and yet there are neither teachers nor books for them (P 52)と、日本語を教える学校も先生もいないと言う。十数年後には初代文部大臣となって森は日本語による教育制度の充実に邁進していくのだが・・・

さらに、森は日本語の表記の単純化に心を砕いていたようで、「The only course to be taken, to secure the desired end, is to start anew, by first turning the spoken language into a properly written form, based on a pure phonetic principle. It is contemplated that Roman letters should be adopted (P 52)と書いている。

日本語の表記の問題は当時の洋学者の多くの関心事だった。我々は、ここに日本語の問題が漢字に集約されているのを予見する。その学習の困難さから、一部の知識階級に独占されがちであり、国力発展を目的とした教育の普及も阻害されうると考えられていた。それ故に、表記を仮名かローマ字にしようとする発想が出てくるが、そうなると漢字が組み込まれている故の同音異義語が文の迅速で正確な理解を妨げることになる。それでは漢語を避けて大和言葉のみで文を作ろうとすると、社会制度を律する行政的な文書等が能率よく作れない。そこから森の日本語は貧弱だという嘆きになる。

その思いは次のような文にも滲んでいる。「It may be well to add, in this connection, that the written language now in use in Japan, has little or no relation to the spoken language, but is mainly hieroglyphic---a deranged Chinese, blended in Japanese, all the letters of which are themselves of Chinese origin (P 52)

そこで、いっそのこと世界で一番有用と思われていた英語を国語にしては、と考えた。国語英語化論である。

それでは、森は英語を学びやすいと考えていたのであろうか。「It is the opinion of these gentlemen, including those who understand English best, that while then would be little or no difficulty in introducing into all the schools of the Empire, and gradually into general use, a "simplified English", it would be on the other hand, nearly useless to make an effort in that direction, in behalf of the English language in its present form - a language so difficult to be learned, that by far the larger proportion of persons, with whom it is vernacular, speak and write it incorrectly (P 53)と、母語話者でも正しく話したり書いたりできないほど難しいから、簡易英語を導入したいと言い、かつ他のところで、英国やアメリカは自国民のためのみならず英語を使う他国民のために自分が提案する簡易英語を採用すべきだとさえ主張する。

そのような言語革命を英語国民に対してさえ唱える森は、言語とくに母語のもつ計り知れない奥深さを知らなかったと批判できるだろうし、それは現時点では易しいことである。ホイットニーはもちろん森のこのような文化に対する森の無理解を遠回りに諷めている。

しかしながら、森のこの論から、日本が近代国家として発展していくための、日本人全体が容易に学べる基本的な道具としての言語をいかに熱心に求めていたかがよく理解されよう。そのような言語として日本語は森には失格のように思われた。

外国人とコミュニケーションするためには、英語が便利なのは当時も今も変わらない。簡易英語の国語化を考えていた森は、交易などを通じた外国との交流による日本の発展のためばかりではなく、純粋に国内における教育を基礎とした総合的な国力の発展・成熟を目指していたと思われる。

それは、簡易英語の利点や学び易さを述べた後、「many of the reasons which might make Americans and Englishmen hesitate to attempt radical changes in their language for their own people, do *not* apply to the case under consideration, which is the adaptation of the English language to the necessities of a foreign nation of forty millions of souls, separated by thousands of miles from the English-speaking nations, and which affords an entirely free field, for the introduction of a new language; there being no obstacle whatsoever within the Empire itself (P 56)と続くところから推測される。当時の日本語よりも簡易英語のほうが、敢えて言えば外国との交易を棚上げしても、日本の発展に役立つという確信が森にはあった。

そして、あまり知られていないことだが、簡易英語でなく、英語そのままの国語化は不可能だと次のように述べている。「the English language “simplified”, as I have indicated, would be received by them (the people of the Japanese Empireを意味する) as a boon, while it might be quite impossible to force upon the language in its present form (PP 56 ~ 57)

当時の洋学者として極めて高度な英語力を身に付けた森は英語の難しさもよく理解していた、と言えよう。

第三章 森有礼の国語英語化論への反論

ホイットニーの森への返事は、国語を廃止して英語を代置するという基本的な論に関しては否定的であった。森の手紙の内容を受けて漢文を学ぶ有害さに言及したあと、ホイットニーは次のように書く。

But of the Japanese language itself I feel very unwilling to take a depreciatory view, or to accept any plan for the advancement of culture in Japan which does not include the ennobling and enriching of the native speech so that itself shall become a means of the increase of culture. Even with a fully-developed system of national instruction, it would take a very long time to teach a strange language to so large a part of the population as to raise the latter in general to a perceptibly higher level. If the masses are to be reached, it must be mainly through their own native speech.

〔新修森有礼全集 第5巻 大久保利謙監修 文泉堂書店 1999年8月 P340〕

日本語が豊かになること、また日本語を通してでなければ、国民全体の文化の成熟は期待できない、とホイットニーは現在から見ても当為を得た意見を述べて、森の国語英語化論に反対する。「Let the English language be studied as much as possible; let it take in Japan the place so long occupied by the Chinese; let it become the learned tongue, the classical language (P341)と、英語が中国語(いわゆる漢文の意味と思われる)の代わりに、豊かな知識を媒介する古典的な言語になることが望ましいと言う。

これはまさに、英語を中心とした西洋語を通して日本が近代科学を学んだ現代史を考えると、そのまま実行されたといってよい。ホイットニーは、森の日本語のローマ字化の案に呼応するように、「the writing of Japanese for the use of its own people in a phonetic mode, with the European alphabet, appears to me the first and most important of possible reforms」と、賛成しているし、これは極めて実現性が高いと熱心に勧めた。彼は日本語をよく知らないの、すなわち、漢語の日本語の中での有用性が理解できないところから、余りに容易な結論を下したの

だろうと思う。

森が英語国語化の前提として求めた簡易英語の導入に関しては、「All change of that speech, such as you propose, would be a barrier between the Japanese and English speaker of English, and would shut out the former from access to the English literature. The new English(such is the power of prejudice)would seem laughable and absurd to the speakers of the old, and those who used it would be visited with the contempt of the latter」という理由で否定的である。国語を英語にするメリットは英語国民の優秀な文化や知識を吸収することにあるのに、へんな英語を学んではその仲間になれず、思想や文学を理解することも出来なくなると言う。この考えの底には、民族にとっての母語の重要性という原則がホイトニーの中に生きていて、それが森の論に対する反論の根拠にもなるので、彼の意見の一貫性が見えると言える。

ホイトニーは森の国を思う情熱に動かされながら、結論として次のように言う。

At any rate, generations must pass before the full realization of any plan that concerns the fate of a great nation ; we at this time can only initiate a movement which shall be carried out by those who come after us, with an insight into the conditions of the case which we cannot possess by anticipation. And the fundamental features of the plan which I should favor, as likely to lead to the best results would be these :

- 1 . To accept the English language, in its form as spoken and understood by those to whom it is native, for the standard and classical language of the new Japanese culture.
- 2 . To make English more easy of acquisition by the preparation of text-books for learners in a purely and consistently phonetic orthography, one which will best teach its real or spoken form ; adding then later, as a thing necessary for one who wishes to gain the full benefit of his knowledge of English, instruction in the usual orthography.
- 3 . To write Japanese in a method agreeing with that adopted for English ; and to open the language, as rapidly as circumstances allow, to enrichment from the stores of English(as well as of any other modern tongue which the conditions of the case shall suggest) ; with the idea that justice to the masses of the Japanese population requires their vernacular to be made for them a means of higher culture, that the substitution of any other for it must at the best be the work of generations, and that only the future can determine its practicability (with a heavy probability against it, as deduced from the history of languages in the world thus far).

〔新修森有禮全集 第5巻 大久保利謙監修 文泉堂書店 1999年8月 PP 342~343〕

このように、森が尊敬し意見を求めたホイトニーは、国語英語化論には基本的に懐疑的であったが、日本語の表記をローマ字化する改革を実現可能と考え日本の文化の発展に寄与するとして勧めた。

注意したいのは、ホイトニーの反論にも拘らず、森は国語英語化論を公表した。そこには、ホイトニーへの手紙の中で森が熱心に説いていた簡易英語の導入という考えは影を潜めた。そこに何を見るべきか、という新しい課題が出て来た。簡易英語の導入は、正式の英語で書かれた科学・思想・文学等の知的蓄積への接近を困難にするというホイトニーの主張を森が理解しなかった筈はなく、そこから、国語英語化は日本人が日本語で書かれた知的生産物への接近を

不可能にすることになるという論理を森が理解しなかったとは思えない。森に対する批判は、そこから生じる日本人のアイデンティティの喪失への無感覚に集中する。森が、欧米の力を目の当たりにしてそれほど西洋かぶれになってしまったのか、それほどまでに、日本語が国語として日本を発展させる基本的な道具として不備に思えたのか。おそらくはこの二つの理由が当時の森や他の知識人達の思考に影響を与えていたのであろう。そして、森は日本語を廃止することに伴う不利益にも拘らず、国語英語化論を唱えた。その直後に馬場辰猪がイギリスで反論する。

We have two objects in publishing this book---the first, to give a general idea of the Japanese language as it is spoken; and the second, to protest against a prevalent opinion entertained by many of our countrymen, as well as foreigners who take some interest in our country, and to show the reasons why we do so. It is affirmed that our language is so imperfect that we cannot establish a regular and systematical course of education by means of it; and that the best way is to exterminate the Japanese language altogether, and to substitute the English language for it. Those who maintain this opinion ought to have examined the language and proved its imperfection as a medium of intellectual thought and expression, but so far as we are aware they have not done so.

For example, Mr. Mori, in his introduction to "Education in Japan," says, "without the aid of the Chinese, our language has never been taught or used for any purpose of communication. This shows its poverty."

〔新修森有禮全集 第2巻 大久保利謙監修 文泉堂書店 1998年3月に収録された『ELEMENTARY GRAMMAR OF THE JAPANESE LANGUAGE WITH EASY PROGRESSIVE EXERCISES』(日本語文典)の序文 PP 58~59〕

馬場がこの本を執筆した二つの理由の一つが森有禮らの国語英語化論に反論するためであったことが明確に述べられている。また、森の主張が日本の教育システムを構築する要である教育言語として日本語の不完全さに起因している、ことを推測させる。

欧米への留学生が極めて稀であった当時に、彼等が機会さえあれば集まり、日本の将来に関して議論していたことは自然なことだし、犬塚孝明著の『森有禮』(吉川弘文館1986)にも留学生が日本における政治的立場に関係なく交流し意見を交換した様子が述べられている。

国語英語化論は森有禮が公的に発表したものとはいえ、かなりの賛同者もいたことも窺える。しかし、馬場に代表されるように反対の者も多かったであろう。

馬場は、英語も日本語もそれぞれ長所も欠点もあり優劣はつけがたく、総合的に判断すれば、日本語で日本の教育をになっていけるし、もし英語のような学習困難な言語を国語にすれば極めて大きな時間の損失になる、と反論する。

例えば「We admit that in several respects the English is far superior to the Japanese, but at the same time, we think in many respects the latter excels the former」や「after a careful examination, it will be found that there are perfections and imperfections in both languages (P62)とある。さらに「Although we admit many advantages of supplanting our language by the English tongue, yet at the same time we cannot help thinking that there are many reasons for preserving the Japanese in our country as the medium of education. We shall state here the principal. The

English language, which is one of the most difficult of modern languages, and entirely different from our own, will require a very long time to be mastered by so many people, so that much precious time will be thrown away (PP63~64)と、英語を国語にする困難さを指摘する。

また、外国語を押し付けられた民族も母語を維持するものだと具体例を挙げて示し、その重要性に触れている。

漢字の助け無しでは日本語は機能しないという論点に関しては、「Before the introduction of Chinese we must have had some sort of language which served as a means of communication. Since we introduced the Chinese classics, literature, &c., we have been obliged to use Chinese words or phrases which we could not express in Japanese, and so it became necessary to teach our language with the aid of Chinese. This is generally the case when one nation introduces the classical literature of another country; because there are always many words in the latter, for which the language of the former cannot find synonyms or equivalents (P59)と、それは新しい文化に出会う時にはどこでも起こることだと言う。英語にもラテン語の言葉がたくさんあることを指摘している。

ただ、日本語における漢字の表記や読みの難しさに関しては、馬場は言及していない。インドなどの例を出して、知識階級が英語を学んでそれをもって社会生活が行われるようになると、言語による社会差別が国家の連帯をさまたげる弊害を上げている。現在の英語によるデバイドの問題が論じられていることは、この問題の現代性を感じさせる。

馬場は、森の『Education in Japan』の中に収められた、我々がすでに言及したホイットニーの手紙の一部を引用して、母語を通しての教育の有用性に触れたあと、「We think, also, that it is more desirable to try to enrich and complete that which we have already, and which is, consequently, familiar to us all, than to discard it and substitute, at a great risk, that which is entirely different and necessarily strange to us」(P66)と、結論を下している。

馬場の反論は、曲がりなりにも日本語で開始された教育システムが何度かの国語改革の後で安定し、戦後の民主主義の中で教育を受けた我々にとってはごく正論に聞こえる。日本の教育も他の先進国と比べて欠点がないではないが、それなりに整備されて安定していると言えよう。世界の先端の研究が日本語でできることがその証でしょう。

森とホイットニーとの往復書簡と、森の国語英語化論に関する馬場の反論をかなり詳細に検討した。ここから、森の意見がより客観的に見えて来たと思える。

まとめてみると、明治政府の富国強兵すなわち日本の近代化と独立の成否の鍵が教育にあり、そのため日本語のようなour meagre languageでは駄目であるという認識があり、それが森を国語英語化論に走らせた。ホイットニーの忠告の後に、本が出版されている点からも森の決意あるいは思い込みが察せられる。先に指摘したこの問題点について考察する。

簡易英語の導入の案をホイットニーから否定された森は、母語話者にとっても難しい英語を導入するか、不完全な日本語でいくか、選択を迫られた筈である。簡易英語に言及せずに英語国語化論を73年の元旦に書いた森の心中は複雑だったと思う。

ホイットニーへの手紙であるがままの英語の修得は困難すぎて日本国民に強いることは出来ないと書いた森は、英語採用の実現性に強い懐疑を抱き、それ以後は、日本語の改善に期待しながら日本語による教育システムを構築するように決意をしていたのだらうと思われる。そのころ、民衆の啓蒙運動に多くの洋学者がかかわり、特に日本語表記に関して多くの意見がだされ、言文一致の運動も盛んになっていく。為政者としての立場もあろうが、英文で国語英語化論を

唱えた森は、その後、自説を繰り返し説くことはなかった。ただ、教育こそが国家の礎と、教育制度の確立に打ち込んだ。神道系の凶徒の手によって、帝国憲法の公布の日に致命傷を受けるまで。

何故、これほどまでに日本語が森には貧弱に見えたのかを考えると、当時の西洋文明を支える自然科学やそれを育んだ人文・社会科学の膨大な概念を表現する語彙が日本語に欠如していたことを挙げる事が出来る。森達留学生がオランダ語や英語、さらにはフランス語・ドイツ語でそれらの概念を学び、日本人に伝えようとした時、その概念を示す言葉が見つけれずに、もどかしさ・悔しさを感じたことは推測に堅くない。日本には当時の欧米で発展していた科学が知られていなかったのだから当然なのだが、それを日本語で日本人にうまく伝えられないことに、国家の危機を森が感じて不思議はない。

もう一つ、見逃してはならないのは、日本語に対する不信は、特にその表記の問題から由来していたということである。漢字仮名混じり文にならざるを得ず、その漢字は修得に多大の苦勞を要す。当時の書き言葉は漢文調で、旧漢字が使われその数も現在のように教育漢字や常用漢字といった形式で規制されていなかったことを思い出す必要がある。それを26文字のアルファベットで済ます英語と比較すると、特にその非能率が痛感された。

森の国語英語化論を単純に言えば、この2点に絞られる。さらに、この2点には密接な関係がある。すなわち、森は日本語を日本という国の教育を担うにはあまりに不完全な言語と考えた。その主な理由は、西洋文明を支える科学の概念が日本語には欠如しており、かつ日本語が漢字なくして成立せず、またその漢字の数の多さや複雑さに起因する学習困難さにあったと考えられる。

単純化すると、日本語の語彙不足と表記の複雑さ・困難さから教育システムが完全に機能せず、それが文明の発展の障害になり日本の衰亡の原因になる、と論理的に整理できる。

第四章 森有礼の国語英語化論の妥当性の検討

さて、現在の時点で森の立論を考えてみる。彼が心配した日本の発展は、明治・大正・昭和を通じて、曲がりなりにも達成されたと言える。第二次世界大戦に突入していくまでに、日本は近代国家として独立を維持し国力を蓄え、世界の列強と肩を並べるに至った。特記すべきことは、まさに日本における初代内閣総理大臣伊藤博文によって初代文部大臣に若年にして抜擢された森有礼が心血を注いだ教育制度は充実し、日本における識字率の上昇は欧米からきたいわゆる御雇外国人をたいそう驚かしてもいる。

さらに、植民地支配や多民族多言語故に、英語・フランス語といった国連の公用語でもある欧米の言語を公用語としている国々が、経済的になかなか離陸できない現在の世界情勢を見ると、森の国語英語化論の主な立論は現実によって反駁されたと言える。

身近な例は、まずスペインに植民地化されのちにアメリカの影響を強く受け、英語を公用語にしているフィリピンがそうである。他に、旧イギリス植民地の、インド・ミャンマー・パキスタン・イラクと枚挙することができる。アフリカでは、エジプト・ケニア・ナイジェリア・スーダン等を忘れてはならないだろう。

旧フランス植民地は、モロッコ・アルジェリア・チュニジアというマグレブ三国を始め、セネガル・ニジェール・マリ・カメルーン・ガボン等のブラックアフリカの諸国が挙げられる。

シンガポール・香港を考えると、英語の公用語が経済的に効果を上げた例と言えるかもしれない。ただ、香港は広範な自治権が与えられていたとはいえ、イギリスが中国から借りてい

た土地で、現在は政治的には中国に返還された小規模な地域である。残るシンガポールだが、面積618平方キロメートルで、人口は400万前後である。独立国とはいえ日本と比較するにはあまりに小国といえよう。

もちろん、自らが進んで自国の母語を放棄して他民族の言語を採用した国を挙げて日本と比較するというところみは出来ない。そのような民族や国を知らないからである。逆に、一国の中の少数民族が、自分達固有の言語の復活を願って、種々な政治運動に走っていることは、スペインのバスク人、フランスのコルシカ人やブルトン人など多くの例がある。

フランス語系住民が多いカナダのケベック州などでは、言語の問題が独立運動の主な原因となっている。

中東問題のまっただ中にあるイスラエルの言語政策は、森の考えと正反対であるという点で、考慮に値する。パレスチナ人を追い出してイスラエルを建国した人々は、なんと死語であったヘブライ語を民族固有の言語という理由で復活し国語とした。そして、ユダヤ教の聖典の言語が話されるようになった。イスラエル建国に参加した世界に散らばっていたユダヤ人は英語やフランス語を話す人間が多かったから、それこそすんなりと英語かフランス語を国語にすれば経済的にも実際的にも効率がよかったことは確かである。しかし、あえて経済的不利益や不便を覚悟の上でヘブライ語を選び、経済的にみれば中東の優等生になっている。

一国の社会的・政治的・経済的發展と母語あるいは公用語との関係を論じることは、他に多くの要因がある故にどうしても大雑把なものにならざるを得ない。しかし、森が明治維新の危機的な時代に直面し提案した命題がそのような大問題であったのであり、それは歴史の中で似たような事例から検証するよりも仕方がなく、上述の議論の仕方も許されると思う。

森の主張として取り出した第2番目の論点について考えてみよう。それは日本語の貧弱さにあった。それを分析すれば、当時の日本語の語彙不足と表記の複雑さ・困難さであった。この問題に関しては、西周・福沢諭吉などの当時の多くの洋学者が心を砕いていた。国語の平仮名化・ローマ字化や、漢字制限が提唱された。言文一致運動も起こった。そのような様々な議論を通して、日本人があるいは日本語が出した解決策は、漢字の造語能力を利用して西洋の概念を移入し、一方で遅々とした歩みであったが、学習負担を軽減しすべての国民が活字文化の恩恵に浴せるようにと、旧漢字を新漢字へと置き換え、さらに教育の場や主な活字媒体である新聞などにおいて漢字の使用制限をすることであった。

西洋人からみれば極めて不合理で困難な漢字を内包し、西洋の概念を持っていなかった日本語の改革が、その欠点とみなされていた漢字の潜在能力を利用して行われたことは矛盾の止揚の好例かもしれない。漢字の中国読みを音読みという形で継承し、意味から大和言葉の訓読みをその漢字に当てるといった日本語の特徴が、漢字による西洋の概念の受容のときに、多くの新概念を身近なものとすることに役立った。この点に関しては、鈴木孝夫が岩波新書の『日本語と外国語』の中で詳細に説得力に富んだ分析を展開している。その見事な洞察に賛成し、漢字仮名混じり文である日本語故に、すなわち漢字とはそれを抜きにしては日本語が成立しないまでに日本語の一部になっているという言語的現実が、西洋文明・文化の概念を日本に移入することに役立ったと認める。

戦後58年の現在、森の国語英語化論の根拠は現実によって否定されたと結論することが正当だと思われる。ただ、新漢字と新仮名遣いの採用により、戦前の書籍が戦後に教育を受けた人間達にとって非常に読みにくくなり、そこに歴史的に見て知的断絶があり、それをいかに克服するかを考える必要があると指摘したい。さらに、このように日本語が国語として森の懸念を

はねのけて成長したにもかかわらず、何故に、あたかも全国民が英語を学ばなければならないというような強迫観念にも似た考えが存在するのか。ここまで説明してきた困難を乗り越えて存在する日本語において、何故に、活字離れが起きているのか。序論において現在の言語状況として提出したこの二つの問題がより先鋭な形で提起されることを指摘しておきたい。(以下、次稿)